

<研究ノート>

就労を通じた女性のインテグレーションの 過程に関するインタビュー記録

—ペアレント・メンター事業参加者のインタビュー結果—

仁科伸子¹⁾

キーワード：インテグレーション，エンパワメント，コミュニティ，社会福祉援助方法，移民
Keywords：Empowerment, Integration, Community, Social Work Skill, Immigrant, School

シカゴ市ローガンスクエア地区で20年にわたって実施されているペアレント・メンター（Parent Mentor：以降省略形PMと表記）事業は、英語を母国語としない子どもの学習を支援すると同時に、貧困や過酷な労働に従事し、英語が話せないために社会的に阻害されている女性たちの地域社会へのインテグレーションの足がかりとして成果をあげている。この事業に参加し、現在、地域コミュニティの中で働く女性たちへのインタビュー結果をここに記録しておく。

1. 本研究の意義

インテグレーションとは、統合とも称され、主には社会的に何らかの不利な条件を抱える対象者が地域の中で排除されることなく統合されて生活していくことである。インテグレーションは、社会福祉援助方法論の中でも重要なテーマである。特に、移民問題においては、地域社会の中で異質な存在として差別され、情報や教育、生活サービス、地域コミュニティから等から排除されないように支援することで、自立や統合を促すことが重要である。

ローガンスクエア地区で活動するローガンスクエア・ネイバーフッド・アソシエーション（以下

LSNAと省略）が実施する移民支援活動はマーク・ワレンによって学校と地域のつながりの重要性（Warren 2011）、スー・ホンによって、ペアレント・メンター事業の地域貢献性（Hong 2011）について研究されている。

本研究では、社会福祉援助方法論の観点から、この事業に関する移民のインテグレーション、及びエンパワメントに焦点を当てている。LSNAは、過去20年間移民女性たちを支援することによって、地域のコミュニティ・オーガナイザーやバイリンガルの教員等を数多く輩出しており大きな成功を収めている。本研究の意義は、この事業を社会科学的な立場から分析をすることによって一般化し、他の地域における移民支援のケースやその他の分野においても応用できる技術や方法に資することが可能であると考えられる点である。

2. 背景 —LSNAとペアレント・メンター事業—

(1) ローガンスクエア・ネイバーフッド・アソシエーション（LSNA）とは

シカゴは、アメリカ合衆国の大都市の中でも、ラテン系移民が多い都市のひとつである。ローガンス

1) 熊本学園大学社会福祉学部准教授

クエアでは、1980年代以降、メキシコをはじめとするラテン系移民が増え始めた。LSNAは、住宅、法律、生活、教育などさまざまな側面から人々の生活をサポートする民間組織である。近年、このような地域組織はコミュニティ・エージェンシーまたは、コミュニティ・オーガニゼーションと呼ばれている。

(2) ペアレント・メンター事業とは何か

移民の母親たちを組織化して、地域の小学校で授業のサポーターとして育て、子どもたちの授業のサポートを行う事業を立ち上げた。移民の子どもたちは言語や経済的な問題から授業についていけない、他の人種と比較して進学率が低い、退学が多いなどの課題を抱えている。

概ね10人一組の母親グループを組織し、メンバーのうちコーディネーターがクラス担任と調整してPMを教室に派遣する。PMは、教室の中で授業についていけない子どもたちの隣に座って授業を助ける。1995年から現在までの間に約15,000人のPMが事業に参加した。LSNAは研修を行って教えるスキルや情報提供を実施している。

3. 研究計画と研究方法

研究の第一段階では事業参加への経緯、現在までの経緯について10人のPM経験者に半構造化インタビュー調査を実施した。準備期間を含めてインタビューの実施時期は、2014年8月～2015年3月である。

対象者は、LSNAを通して紹介を受けた1名からスタートし、次々に紹介を受けるリレー式に実施した。このインタビュー調査の目的は、PM事業に参加した女性のエンパワメントやインテグレーションの過程において重要と考えられるファクターを抽出することである。

質問項目は、次の通りとした。

- 1) 現在の状況
- 2) PMを始めたきっかけ
- 3) PMにおける体験
- 4) PM体験後の変化

5) これからの目標

インタビュー結果は今後コード化して比較検討する。

第二段階目として、エンパワメント・インデックス、及びインタビュー調査から得た「重要な経験(Important Experience)」についてアンケート調査を実施し仕事を心得て自立した女性たちのエンパワメントとインテグレーションの要因分析を実施する予定である。

アンケート調査は、LSNAの協力により過去にペアレント・メンター事業に参加した人々に対して、記述式の留め置き調査を実施し、これを統計的に処理して、エンパワメントの程度と経験の関係性を明らかにする予定である。

本稿は、研究全体の中では、第一段階のインタビュー調査にあたる部分を取りまとめたものである。

4. インタビュー結果

インタビュー対象となった10名は、教員、コミュニティ・オーガナイザー等の職業について地域のために働いている。1名はバイリンガル教員として地域の小学校に勤務、1名は無給であるが小学校の運営委員として会長の地位についていた。10名のうち8名はラテン系である。2名は幼少期にアメリカに来たラテン系、1名はアフリカ系アメリカ人(ネイティブ)、1名はアフリカからの移民、6名は成人してからシカゴに来たラテン系の移民であった。10名のうち2名は10代の妊娠によって高校中退していた。10名のうちペアレント・メンター事業の経験後、言語の習得のため新たに学校に通ったものは8名である。

以下に、インタビュー結果を記述する。

(1) Aさんの話(2015.03.9)

Aさんは、初期のペアレント・メンター(以降PMと省略表記)の一人である。現在22歳の息子がPre-K²⁾のときから始めて、コーディネーターを経て、現在はPMの教育に携わっている。

2) アメリカ合衆国の5歳未満の学校教育 (Pre-Kindergarten)

息子に障害があったため、頻繁に教室に行っていた。その中でPMを知り、参加するようになった。

PMを経験したことは、自分自身の息子の教育にも多くのベネフィットがあった。息子は、障害があり、そのための情報や教育などについても多くの情報を得ることができた。クラスの中には、診断されていないけれども障害のある児童、生徒がおり、授業についていくことが難しいと思われることも多い。

PMには、いくつかの役割がある。必ずしも教室で教えるわけではない。PMは英語のわからない生徒をサポートすることもあるし、教師が、グループを回って指導するときには別のグループの面倒を見ることもある。PMは、エプロンをかけて、教室に入るが、このエプロンのポケットの中には、消しゴムや鉛筆や、その他の文具を入れていた。鉛筆さえ持たずに学校に来る子どもも少なくなく、教員が、さあ、鉛筆を出してといっても出すものがない。そのとき私が行って、鉛筆を差し出すと子どもはうれしそうにする。そして、何度も借りているうちに自分の文房具を持ってくるようになる。集中力が足りない生徒には、「今、ここを説明しているよ」と示してやることもある。いかにして、先生を助けるかに心を砕く必要があるし、生徒の立場に立ってサポートすることも重要だ。

PMのメリットは、仲間ができるということである。また、LSNAを通じて、さまざまなインフォメーションを得ることができる。自分が何らかの社会や学校や地域の役に立っているということが重要である。

PMは、100時間以上訓練して漸く謝礼がもらえるようになる。それまでは、ボランティアとして参加する。最初のうちは、訓練だと思って参加しているし、現在では、金曜日ごとにトレーニングを実施している。

PMにはかなり厳しい決まりがあり、始めるとき

には、誓約書にサインをする。時間通りにきちんと持ち場に着くことや、ゴシップを流布しないことなどは特に重要な決まりである。

PMは、コミュニケーションスキルが重要である。教員のクラスマネジメントを助ける役割でもある。

学校の中でPMをまとめていく役割にコーディネーターがある。コーディネーターは、学校、教員、生徒、PMどうしをつなぐ役割を担う。私自身がPMであったときのコーディネーターは、非常に厳しかった。3回遅れると、規則どおりにPMの資格を取り上げ、「もうこなくていいよ」といわれた。私自身がコーディネーターになったときは、PMの話じっくり聞くことと、教員が何を求めているかに耳を傾けた。コミュニケーションスキルがとても重要だ。また、PM自身の話にも耳を傾ける。私がコーディネーターをしていたとき、とても権威主義的な夫のいるPMがいた。PMの集まりに出かけようとすると、「またでかけるのか、家のことをきちんとやればいいのに」という。あるとき、この夫がPMの集まりに来る妻を送ってきたとき、私は「あなたも一緒に参加したらどうですか」と誘った。夫は、その時には居心地悪げだったが、その後妻の活動に理解を示すようになり、今ではPMの集まりやさまざまな行事で運転が必要なときや力が必要なときに一番に助けに来てくれる。

PMとして働くことによって、自分の子どもとの関係が改善される、学校で起こっているさまざまなことがわかる、自分の子どもの教育に対するコミットメントのあり方が変わる。そして、教育に関心を持ち、新しい可能性に向かってモチベーションが開かれる。

PMとして働いているときに、受け持ちの教室の先生から「あなたには教える才能があるから、教員になったらいいのに」といわれ、グロウ・ユア・OWN・ティチャー (Grow Your Own Teacher³⁾ ; 省

3) GYOT は、地域でバイリンガルの教員を育てるために、地域の小学校などで夜間に開講される教員養成のコースである。このコースの設立は、PMの事業を通じて参加者から教員になりたいとの要求が生まれ、LSNAのサポートによってなされた。現在では、イリノイ州の補助事業として州全体に拡大されている。

略形 GYOT と表記)の制度を使って学校に行き、資格をとった。昨年、産休の補助教員になるチャンスが巡ってきたときには、母の看病をしていてその機会を生かす事ができなかった。このため、現在は、フルタイムの職業には就いていない。しかし、今後は地域の中で、バイリンガルの教員として働いていこうと考えている。

(2) B さんの話 (2015. 03. 11)

アフリカ系アメリカ人の女性。20 代の子どもがいる。

20 年前に最初の PM として登録した一人である。現在はコミュニティ・エージェンシーの職員として正規採用され働く。

1995 年私は、3 人の子どもを連れてローガンスクエアに移ってきた。私は、サウスシカゴの黒人地域に生まれたが、家賃が安かったのでローガンスクエア地域に移ってきた。誰も知り合いがなく、誰か知り合いがほしかった。当時のローガンスクエアは、90%がラテン系の居住者で占められ、言葉も文化も何もかも私にとっては新しいものばかりだった。

ある日学校に行ってみると「ボランティア求む！あなたが必要です！」「コミュニティについて学ぼう！」という張り紙があった。私は、当時とてもシャイだった。こんな複合的な文化を持った地域に住んだのは初めてであったし、言葉もわからない。でも、思い切ってボランティアに参加してみようと思った。コミュニティについて学びたかったから。

そこには、60~70 人の親たちが集まっていた。自分以外全員がラテン系の移民のようで、言葉もスペイン語ばかりでさっぱりわからなかった。帰りたかったが、シャイだったので席を立てて帰ることができなかった。

そこで、オーガナイザーが私たちに尋ねた。「家族や、コミュニティや、子どもでなく、10 年後にあなたはどうなっていると思いますか？あなたの夢は何ですか？」私の夢なんて考えたこともなかったけど、それを聞かれてはじめて、自分について考えるようになった。

私の夢は、土曜日の午後 1.5 エーカーの庭がある家のポーチに座って庭を眺めることだった。まだ、いまだにそんな庭のある家は手に入れていないけど、それが私の夢だったし、これからもそうだ。PM の研修では、みんなが自分の夢を実現するための計画を立て、それが実現できているかどうかを確認する。

そこで私ははじめてみんなの前で話すということを経験した。

PM は、親、校長、先生、生徒、みんなにとってのチャレンジだ。私も最初に先生と話すときには緊張した。先生だって、親が教室に入ることについては、緊張したと思う。自分の教え方について親がどう思うか、自分のことを好きになってくれるかと考えるだろう。

私は、きちんとした教育を受けたわけではなかった。私は、16 歳で最初の子どもの妊娠し、高校から脱落した。典型的な若いシングルマザーだった。高校を中退した自分が、学校で PM として受け入れられるのだろうか、自分に子どもたちのサポートができるのだろうかと心配だった。

私がローガンスクエアに来たころには、学校の周りは朝から渋滞していた。学校に子どもを送ってくる親の車でなく、朝から車の中で売春行為が平然と行われているような地域だった。そして、4 つのギャング組織がそれぞれの縄張り争いをしており危険だった。このため、私たちは、パトロールを始めた。1996 年にはモトローラが寄付金をくれて、オレンジ色のベストを着てトラシーバーを持ってパトロールするようになった。すると、ほかの親たちが、「何をしているの？」とたずねてくるようになり、これまでボランティアに参加していなかった親たちも参加するようになった。

PM は、子どもたちの授業中のサポートだけでなく、地域の安全や、宿題のサポートや、スポーツやアフター・スクール・プログラムが必要だったが、これにお金を出せる親はほとんどいなかったため、寄付を集める必要があった。あるとき、私がある散髪屋に寄付をお願いに行くと、「あんな危ない学校

に誰が寄付をするんだよ」と一笑に付された。このとき、私は、「どうしてもこの学校を良くして彼を見返すわ!」と誓った。

10年前の自分はどうだったのだろうか。

私は、1.5 エーカーの庭のある家は手に入れていなかったが、仕事をしていた。ある時、コンドミニアム改装会社がやってきて、コンバージョンするから移転してくれといわれた。このため、補償金をもらって、ローガンスクエアからは出て、ノースローンディールというアフリカン・アメリカンのコミュニティへ引っ越した。子どもたちは転校し、新しい学校に行くようになったけど、厳しく躰し続けた。ラテン系の地域で育った子どもたちは、新しい土地では、話す言葉は違うし、いったいどこから来たんだと聞かれていた。

1998年に、卒業していなかった高校へ行くことにした。PMをはじめてから3年後のことだったけどこのことは、その後の自分の職業領域をととも広げてくれたと思う。高校を卒業した後は、コンピューターのクラスを取って、そこからは、別のコミュニティ・オーガニゼーションにおいてパートタイムで働いた。そこでは、スペイン語しか話せない女性とペアでパートタイマーとして7年間働き、その後退職して一ヶ月間休みをとった。その間に今のコミュニティ・エージェンシーが人材を公募していたので、もう一度彼らと働きたいと思って公募した。すると、Sさん（コミュニティ・エージェンシーのボス）が電話してきてうちで働きたいの?というのでYES!と返事して以来、ずっとここで働いている。

なぜ自分がここまでやれたかということを考えてみる。

何が自分に自信をつけさせてくれたかを考えると、最初は、「先生と話す」「校長と夜学校に集まりたい親のために学校を使用させてくれるように交渉する」といった、小さなステップを積み重ねるうちに、徐々に話せるようになった。そして、小さな成功を積み重ねるうちに、自信が生まれてきた。

PMはすぐにととも人気のある成功したプロジェクトになったので、最初のPMとして、人前で話す

機会も与えられた。これがとてもよかった。人前で話せることや、自分の経験が貴重なものとして扱われて自信や自尊心が育っていき、これらのことが今の自分を形成していると思う。

仕事を始めると時にはビジネスマンと対等に話をする必要もある。それまでビジネスマンなんかと話したとこともなかったし、きちんとした英語を話す教育のある人と話すことが初めてだったけれど、寄付金を集めるために、彼らとも話をする必要があった。そこで自分の目的を果たすということが非常に重要だった。そういう小さな成功が私の今を作ってきたと思う。

(3) C さんの話 (2015.03.12)

移民第一世代の女性。最初は、英語が一言も話せない状態からスタートした。

現在、コミュニティ・オーガニゼーションのレセプションリストとして働きつつ、GYOTのプログラムにより、教員になるための大学のコースを受講中。

2004年に初めてモンロースクールのキンダーガーデンでPMを始めた。PMをはじめて思ったことは、25人の子どもを一人の先生で面倒を見ることはムリだということだった。PMはローガンスクエアだけでなく、どこの学校でも必要だと思う。私が、PMを始めたときには、英語は全く話せなかったのよ。信じられる? PMをはじめて、英語も習ってこのとおりに話せるようになったの。

私には、9年生、8年生、キンダーガーデンの3人の子どもがいる。

私の母は、家で母親さえやっていけばいいんだよ。仕事なんてできないよという考えだったのだけど、PMに参加して、それは違うとわかった。それは、既に同じラテン系の移民女性として立派に働いているMさんやLさんを見て強くそう思うようになった。みんな子どもがいるけど仕事もしている。子どもたちもとても立派に育っている。

PM事業に参加後、2005年から2年間は、ヘルスプログラムの補助金による仕事を始めた。これは

期限付きの補助金なので、2年間で終わり、私にはもう仕事はないかなと残念に思ったら、次にコミュニティ・オーガニゼーションのレセプションの仕事をしないかと誘われた。それで、今の仕事は2007年からやっている。

将来は、小学校の先生になりたいと考えており、パートタイムでGYOTのコースを取っている。一番下の子どもがもう少し大きくなったら、フルタイムでコースを履修し、小学校の先生を目指すのが現在の目標である。

コミュニティ・オーガニゼーションで働くようになってから、コンピューターも覚えだし、英語もずいぶん話せるように勉強した。常に小さな目標を設定し、それを達成していくことに喜びを覚えている。

MさんやLさんが自分の目標であり、彼らのようになりたい。Mさんは特に自分自身のメンターでもある。

夫も自分が目標を持ち、働くことをサポートしている。夫のサポートがとても力になっている。最初は、そうでもなかったけど、子どもをきちんとサポートし、子どもにもいろいろ教えることができるという点を彼が評価してくれていると思う。

(4) Dさんの話 (2015.03.16)

アフタースクール・プログラムを運営するコミュニティ・コーディネーター。成人した二人の子どもと夫がいる。子どもたちは米国に来てから生まれている。

1989年11月に3ヶ月の息子と夫とともにシカゴにやってきた。シカゴには夫の弟がおり、彼を頼ってやってきた。晩秋のシカゴは寒く、暗く、そして、来てすぐに知らない土地で妊娠して落ち込んだ。暮らしていた家の大家からテレビをもらって見るようになった。そのテレビを先生にして英語を勉強するようになった。その頃、英語を勉強するのが好きだった。子どもとともにセサミストリートを見て英語を勉強した。テレビが私の最初の英語の先生だった。

それで、アメリカに来たときにはまったく英語が話せなかったが、このテレビのおかげで、初めて英語教室に行ったときにはレベル3だった。エクアドルでは、大学3年まで行って中退しているが、当時から英語を勉強することは好きだった。

長男が自閉症だったため、学校での生活や授業を助けるために彼についてクラスの中に行っていた。下の子がMozart ElementaryのPre-Kに入学し、チラシをもらってPMについて知った。トレーニングを受けて、2004年からPMになった。

ほとんどのPMsは最初引込み思案だが、3ヶ月間のトレーニング期間を経て、PMになり、自分の力で自分を作っていくことを知る。

PM同士では、すべての情報をシェア仕合う。PMは、公の人(Public Person)だから、それに恥じない行動をとり、みんなのためにならなければならない意識も生まれる。今では、コミュニティ・コーディネーターとして働き、地域のみんなが自分の電話番号を知っている。

PMとして学校に行くことによって、アメリカの学校の仕組みを知り、情報を得て、自分の子どもを助けることができるのが個人的には大きなメリットだった。

PMになったことで人生の中で新しいドアを開けることができた。印象に残っているのは、あなたの夢は何ですかということ聞かれたことだった。子どもや、家族や学校のことでなく自分自身について考えさせられる体験をした。PMの仕事を通じて、ただのハウスワIFEだったのが、もっと何かできるはずだと思えるようになり、チャレンジするようになった。自分の人生をもう一度生きている。夫もこの変化を喜び、応援してくれた。子どもにとってもよい影響を与えると信じてくれていた。

1年半後、実質的にコーディネーターをするようになった。私のコーディネーターだったEさんのアシスタントになり、コーディネーターや書類仕事などすべてを引き受けるようになった。一緒に働くこ

とによって多くを学んだ。

その後、小学校のアドバイザーボードのメンバーになり、もっと学校の運営に深くかかわるようになった。

2011年9月からは、学校のコミュニティ・コーディネーターとして働くようになった。コミュニティへの帰属感が生まれた。自分の家族が、よい環境に住めるよう、自分の子どものためにこの仕事をする。今も、PM 当時にお世話をした子どもや、地域の子どもたちから顔を知られるようになり、走ってきてハグしてくれる。

コミュニティのために、スプリングフィールド⁴⁾に行き、ロビー活動することで自信がうまれた。

PM で仲間ができ、地域の組織につながることで情報を得ることができた。学校の先生と話すこともできる。コミュニティのためのインターメディアリーとして働いていると自分は考えている。

この役割を担うためには、いくつかの大切なことがあると思う。グループで集まって話をすること、謙虚であること、信頼しあうことが中でも重要だと思う。

夫も、今では私のことを誇りに思ってくれている。私は、LSNA の人たちと一緒に働いていることがとても誇りである。

(5) E さんの話 (2015.03.18)

2006年グリーンカードの抽選にあたって、夫とともにアメリカにやってきた。ナイジェリアでは、女性がエンジニアリングを勉強することは珍しい。エンジニアになろうと思ったが男社会でなかなか難しいとわかり、数学の教員になった。

ナイジェリアでは学校に行くとき、叔父や叔母、いろいろな親戚にお金を出してもらう。大きな家族として助け合う。私が大学に行ったときも、さまざまな親戚が私を助けてくれた。私も、甥や姪に対して同じようにしている。

ナイジェリアでは、女性がエンジニアリングの道に進むことは珍しい。女性の職業といえば、銀行員か、先生、自営業となっていて、専門的な職業につくと結婚しない人も多い。しかし、自分には、いつも自分の学業成績をほめてくれるエンジニアの叔父がおり、この影響でエンジニアになりたかったのかもしれない。ナイジェリアは、子どもに対して厳しい。学業成績はよくて当たり前、できなければしかられる。ほめるということがめったにない。

ナイジェリア人にとって、アメリカに行くことは天国の隣に行くようなものだったから、私がグリーンカードの抽選に当たったときには、多くの友人や親戚からうらやましがられた。今までに旅行した一番遠い国は、ガーナだった。

実際アメリカに来てみて、すぐに仕事に就けないうことががっかりした。自分がとったエンジニアリングのディグリーは役に立たず、教師としての経験は生かされない。親戚は、アメリカに行けばすぐに天国のような日々が待っていてすぐにお金を送ってもらえると信じているので催促される。しかし、どこに行っても、就職は受け付けられなかった。そのことを人に言うと、「スーパーのレジなら雇ってもらえるよ」といわれた。私は、ナイジェリアでコンピューターも学び、ディグリーも持ち、コンピューターや数学を教えていたのに、レジで働くなんてできないと思った。そして、落ち込んだ。

ナイジェリア人は、赤の他人でもアメリカ国内で会えば家族のようなものだ。2011年、ナイジェリア人の友人が、スクールバスの送迎をしていたのだが、自分の学校で、ペアレント・メンターを募集しているよと教えてくれた。「なにそれ？面白そう！是非やってみたいわ」と思い、面接に行くとMさんとBさんが面接してくれた。しかし、PM の条件は自分の子どもがその学校に行っている事だった。私の娘は、5歳から読み書きができていたので、ギフトドスクールに行っていたため、PM にはなれないことがわかった。とてもがっかりし、悲しかった。するとその夜に電話があって、友人の子どもの

4) イリノイ州の州都、議会在立地する場所

ガーディアンだということで、PMになれるといううれしい知らせだった。私は、必要ないのに、自分の履歴書や、これまでの教育経験をすべてもって面接に望むほどの意気込みだったから、与えられたチャンスがとてうれしかった。

一週間のトレーニング後、算数を中心に教えるようになった。私は、先生のように算数を教えたし、子どもも私を先生だと思っているようだった。そして、先生のように学校に行った。そして、学校に行くと皆が私を知っていた。クラスに行くことがとてうれしかった。

二年目も、この仕事を楽しんだ。あるとき、コミュニティ・オーガナイザーのBさんが、「PMの補助金のために、みんな州の議員に電話して」といった。私は、自分のアクセントが気になってちょっと気が引けたけど、電話してみると、みんな真剣に耳を傾けてくれた。これは私の自信につながった。家で電話をしたあと。「ちょっと聞いてよ、今スプリングフィールドの議員に電話したのよ！」と夫と娘に叫んだ。スプリングフィールドにロビー活動をするなど政治的なコミットメントをするようになると、コミュニティに対するつながりをより感じるようになる。

電話をするなんて小さなことだけど、どうやったらゴールに届くか、考え、実行し、ひとつひとつ実現することが重要だと思う。

2012年になるとPMからコーディネーターに昇進した。PMは月曜から木曜に教室に行き、金曜日に研修することになっているが、私は、3つの学校と一緒に研修した。毎週、何かテーマを考えて研修をした。私は、一年間コーディネーターとして働いたが、実は教室が恋しくもあった。政治家や秘書に電話して、PMを見に来てくださいとお願いした。どんな難しいことも、Bさんが“You can make it happen”というので、がんばると実現した。Bさんに、You can do it!といわれると、信頼されていると思ひ、がんばれた。Mさんも支えになってくれた。

PMは、私のすべての生活を変えた大きな出来事だった。

将来は、マスターを取って、また教鞭をとりたい。数学を教えるとか、大人の勉強を助けるとか、何かを教える仕事に尽きたいと思う。今は、何でもできるという気持ちだし、力が体の中からわいてくる気がする。PMによって、私の中の力に気づかされたの。

(6) Fさんの話 (2015.03.20)

16歳と13歳の二児の母で、現在コミュニティ・オーガニゼーションでヘルスケアのプロジェクトを担当している。16歳で妊娠、結婚し、高校を中退したが、工場で働きながら学校にも通って高校卒業資格を取った。アメリカで生まれたラテン系アメリカ人。

2009年10月からPMになった。それまでは、工場で働いていた。工場がどこかに移転することになって、夫婦とも失業した。ある朝、子どもをPre-Kに送って行って、チラシをもらった。これまでもPMについて聞いたことはあったけど、働いていたので気に留めていなかった。家に帰ってチラシを読んで、どんなものかと思うと、インタビューが必要ということでインタビューを受けてPMになった。

PMになったことは、私を開眼させた。トレーニングを受け、グループでディスカッションするうち、違う考えを持っていてもいいと気づいた。それまでは、何か違うことを言てはいけない、何か言ったら人をいやな気持ちにさせるかもと思って黙っていた。でも、グループで話すうちにいろいろな考えがあっていいのだ、人と違う意見を言ってもいいと思えるようになった。

PMになって気づいたことは、先生は25人の子どもをマネジメントするのがとても大変ということである。PMになる前は、教育は先生の責任、親は何もしなくていいと思ったが、それも違うと感じた。子どもたちは、学校の勉強だけでは、足りず、子どもによっては、助けが必要だ。私の子どもも助けが必要だった。さらに、二番目の子どもである娘のときはもっと助けが必要だった。家での教育にもっと力を入れ始め、子どもたちの勉強の力になった。

子どもと働いたのは初めての経験だった。

グループで話をすることによって、さまざまな学びがあった。私は、人と話すのが苦手によく黙っていたけど、グループに参加すること自体によって学んだことは多かったし、情報がたくさん入ってきた。自分がなんと表現していいかわからないことを人がかわりに言うてくれて、「ああ、自分もそう思う」と整理できることもあった。

あるとき、コミュニティ・オーガニゼーションで、Mさんが担当しているフォークロージャーの仕事をするようになった。この仕事では、人と話をする必要がある。自分にとって試練ではあったが、話せるようになった。次に、移民のシチズンシップにかかわる仕事、イリノイ州が実施している子どものための健康保険⁵⁾の仕事をするようになった。学校から健康保険のない子どものリストをもらって家を訪ね、加入手続きをするのが仕事だ。

今後、また学校に戻って、移民の手助けをするパラリーガルになるか、ソーシャルワーカーになるか、何か、ステップアップを考えたい。

(7) Gさんの話 (2015.03.18)

メキシコでは、学校の教員として働いていた。移民としてアメリカに来てからは工場労働をしていた。息子、娘2人、夫がいる。現在、コミュニティ・エージェンシーのオーガナイザーとしてペアレント・メンター・プロジェクトにかかわっている。3人の子どものバイリンガルである。自分たちの国についても誇りを持ち、文化を継承するようにバイリンガルとして育てた。

モンロースクールのPre-Kに息子を送っていく毎日だったが、息子が学校でどうしているか不安だった。息子を送って学校に行くと、チラシを配っている人がいた。以前から、なぜ親の中でも学校に残る人たちがいるのかと思っていたが、そのチラシでわかった。それがPMだった。息子のことを心配していたので、是非PMになって、学校に残りたいと考

えた。しかし、当時は英語が話せなかった。

面接を受けることになった。面接では、あなたにはどんなスキルがあるかを聞かれ学校の教員の経験があることを話した。面接のあと、1週間、15時間のトレーニングに参加した。ここでは、リーダーシップスキル、パーソナルゴール、コラボレーションの3つの分野について、トレーニングを受ける。私はそこで、英語が話せるようになりたいということを目指して据えた。すると、すぐにESLのクラスに入るよう勧められた。夜間に通えるクラスが用意されていた。

PMとして、Pre-Kのクラスに配属された。教室に入ると、メキシコでの教員としての仕事が思い出された。そして、アメリカで教員になりたいと夢みるようになった。

PMとして働くようになって、自分の中のリーダーシップに気づいた。

PMになったことで、スプリングフィールドに行きロビー活動にも参加するようになった。州の議員と話をし、ミーティングに参加するうちに、さまざまなスキルを養い、自分ももっといろいろなことをできると考え始めた。

1998年 パートタイマーとして、Pre-Kに子どもを行かせなかった家族を対象に、ゲームやホームスクーリングの手助けをする仕事にかわった。シカゴ市の仕事だった。面接に行くと、3つの学校を回るため、車と車の免許がいるという。私は、車を運転したこともなかったけれど、運転できるし、車も用意しますといった。私は、すぐに夫に電話し、「車を買って運転を練習しなければ」といった。その時、アメリカに来てから貯金したお金が2000ドルほどあった。そのお金を使って車を買うことにした。家の近所の道路に駐車している車に「2500ドルで売ります。電話×××-×××××」という張り紙があった。私たちはその番号に電話してお願いした。「2000ドルしかないんですけど売っていただけませ

5) イリノイ州では、子どもに対してはすべて健康保険を付与している。親の職場に健康保険がない場合等は子どもだけ州の保険に加入できる。健康保険の有無は、学校を通じて調査される。

んか？」相手は、いいよとってくれた。車はその日本人から買った。2日半運転を練習し、その後仕事に出かけるようになった。

1999年 コミュニティ・ディレクターとしてアフター・スクール・プログラムを運営するようになった。

2000年 Jさんに声をかけられて、コミュニティ・オーガニゼーションで働くようになった。

PMになって、道が開け始めた。どんな機会も逃さないように働いている。私は、GED⁶⁾を受け、Northeastern Universityに入学して卒業資格を手にした。

私は、8人きょうだいの長女で、これまで母を励みにしてきた。母のような母親になりたいと思って生きてきた。メキシコでは、5年間学校の教員をしてきたが、メキシコで得た学歴はここでは通用しなかった。

1991年に結婚してアメリカに来た。私が自分の人生を振り返ったときに、1991-7はとても暗い。私は、メキシコでは教員だったのに、工場で8時間ロボットのように働いた。初めての日、私は、家に帰って泣いた。「私は、幸せではない」と。PMになって、初めて光を見た。2000年以降の人生は、信じがたいほど幸せだ。

私の夢は、アメリカではじめてPMとして私の運命を切り開いたモンロースクールの先生になることだ。最初に自分が自分を見つけたところで、教員になりたい。GYOTで教員になるための資格を取ろうとしているが、最後の単位をとるためには、3ヶ月間休職しなければならぬ。このため機会を見ているところである。

PMは、大きな機会だ。「私ができたのだから誰でもできる」とみんなに話している。みんなのロールモデルになりたいと思う。PMは、私の子どもの教育にも大きな影響を与えている。私の息子もまた教員になりたいと考えている。PMは、私の子どもの学校との付き合い方、教育について教えてくれた。

PMの経験によって得たことは、自分のことを考えられること、違った考えを持った人と一緒に働くことができる、ファンダーと対等に話をするができる、同じ人間として話をするができるといったことで、自分に自信をつけた。

LSNAには、大きな信頼感を抱いている。PMに参加し、コミュニティに対する帰属感を強く持つようになった。私はフンボルトパークに暮らしていたけれど、LSNAは、私の大きな家だと思っていた。PMを経験したからこそ今の自分がある。

(8) Hさんの話 (2015.03.25)

3歳半でメキシコから移民してきた。アメリカで教育を受け、銀行に就職した。このため、言葉には不自由していない。

子どものときから、先生になりたいと思ったことはなかった。銀行を辞めて、PMに出会った。PMになって、初めて生徒でなく教える側をサポートする立場として教室に入ってみると、いかに先生が大変なのかに気づいた。1人の先生にできることは限られている。家でも、娘の勉強を手伝った。

2年間PMを続けて、コミュニティ・オーガニゼーションのメンバーになった。PMとして働くうちに、コミュニティや学校のために働きたいと考えるようになったからだ。当時は、ジェントリフィケーションの波が押し寄せており、これに対抗する活動を行っていた。

そのころ、LSNAで働いているGさんに出会った。コミュニティ・オーガニゼーションでタイピングができる人を探しているというので、そこで働くようになった。Jさんがボスで、セクレタリーとして働くようになった。

私たちは、議員に電話し補助金の交付を後押ししてくれるように頼み、政治的な活動にも参加するようになった。「議員に電話するなんてできない」と思ったけれど、やってみるとできた。

2006年1月に、GYOTのプログラムに則って、

6) General Educational Development : 5教科の試験を実施することによって、高等学校を卒業したものと同等のレベルの学力があるとみなされる。

学校に行くことになった。そのとたんに妊娠した。働きながら、学校に行き、妊婦でもあったが、同じようなバックグラウンドの人々に出会い、助け合って学校に通った。卒業するには、6年間かかった。2011年12月に卒業した。

最初は、代用教員としてストウスクールに入った。あるとき、校長がクラスルームにやってきて、授業を見学していった。授業のやり方が子どもの立場に立っている。英語がわからない子どもへの対応に関しても素晴らしいと感想を述べられた。そして、私が、PMであったこと、GYOTで教師になったことを話すと、とても気に入られたようだった。その後、正式に採用された。教室では、英語が話せない子どもに対して1対1で接している。

将来は、マスターコースに行ってもっと教育のスキルを高めようと考えている。常に、ゴールを設定し、到達していくということが重要だとPMを通じて学んだ。娘からは、私を見ると励まされるといわれている。夫からは、幸せそうだからもっと頑張れと言われてしている。

(9) Iさん (2015.03.20)

7歳でアメリカにやってきたバイリンガル。1年間のPM活動後、現在はストウスクールのコーディネーターとして働いている。小学生の娘が一人。医者を目指す夫とともに、自分自身も学校の教員を目指している。

私は高校生の頃からベビーシッターとして働いており、その雇用者が教会で活動するリベラルな活動家であったため、その影響を多分に受けていると思う。

地元の学校で、PMについて知り、もともと教員になりたかったので、興味をもった。自分にとっては、PMが非常によく組織化されていることが重要であると考えている。

私は、妻や母であるだけでなく、自分の目標を持って生きていきたいと思ってきた。PMはそのためのきっかけとして大変良かったと思う。PMはプロに

よって組織化されていると感じている。

まず、1週間のトレーニングを経て、PMになるが、このトレーニングは、参加者の感情を刺激し、最初は躊躇する集団に対してアイスブレイキングをし、最終的には仲間づくりをしていく。これは、チームで働く上で重要だったと思う。そこでは、「私はいったい誰なのか」を考えさせられる。

また、ローガンスクエアツアーが組み込まれているが、この中にはコミュニティ・エージェンシーの見学が含まれている。エージェンシーではどのような仕事をしているのかを学ぶ。このツアーでLSNAがハウジング、インテグレーション、デモクラシーなどさまざまなことに取り組んでいることを知った。

今、私がコーディネーターをしている学校では、両親の教育水準はそれほど高くない。PMでトレーニングに参加して、学問的に開眼されていく人が多い。多くのラテン系の家族では夫が保守的で妻を守るような関係が主体である。このため、女性は自尊心が低く専業主婦であることを家庭内で求められている場合も多くみられる。

PMの組織では、何かを学んだら共有するということが行われている。LSNAは地域や学校や社会が抱える問題に気づかせてくれる。本来、2時間でいいはずのメンターをもっと長い時間やっている。先生一人に20人の子どもは多すぎる。PMが数人の子どもを手元において面倒を見ている間は、先生はほかの子どもに集中することができる。メンターは、その子どもたちに別のことをやらせたりもするが、子どもたちは集中できなかったり、言葉がわからなかったりする。自分たちのペースで学習できることはよい手助けになる。キンダーガーデンから3年生までの学年にPMを派遣している。

最初の100時間はPMは無給だ。クラスには、集中することが難しい子どもがいる。英語圏以外から来た子どもには挿絵のない本は退屈すぎる。4年生になれなくて、原級留置される子どももいる。

私は、7歳の時アメリカにやってきて、英語を母国語とする人たちの中に入って一緒にやっていかなければならなかった。その頃に、PMがいてくれたら、どんなに助かったらうか。どうやって文章を作るのか、どうやって英語を読むのか、移民してきたばかりの子どもたちにとっては、難しいことばかりである。

ストウスクールの校長は、PMがいてくれることがうれしい。GYOの教員が既に3人採用されている。GYOは既にコミュニティの一部のようなものだ。親と同じ目線を持ち、自分が幼かった頃のことを思い出しながら移民の子どもたちをサポートすることができる。また、移民の家庭や子どもたちがどのような状況に置かれているか体験を通して知っている。そのため、子どもたちの状況を理解しながら支援することが可能である。これによって、もっと良い教員になることができるのである。

PMは、LSNAやほかの仲間を通じて、さまざまな知識を得ることによってエンパワメントされている側面がある。PMは月曜から木曜まで教室に行って子どもたちのサポートをする。毎週金曜には、トレーニングの日となっていて、コーディネーターが独自に組んだプログラムや、LSNAが提供するプログラムなどで、PMたちは何かを学ぶ機会を得ている。

PMは既にリーダーの一人だと思う。子どもたちは、PMから学ぶのだから。PMたちは、既にコミュニティの重要な一部なのだと思う。PMはクラスで大変に期待され、必要とされている。自分を必要としている人がいるということは、それだけで、大きな自信や成長につながると思う。

LSNAのGさんや、Sさんは、本当のリーダーだ。選挙権がない移民は、選挙に行けないけれど、一人のPMが問題を理解して選挙権のある友人や家族に伝えることができる。LSNAはさまざまな知識や、

課題を提示してPMを教育している。

私自身は、将来、幼児教育を専門とする教員になりたい。知識は、パワーだという信念を持っている。

(10) Jさん (2015.03.20)

メキシコからの移民。英語は初歩レベル。現在は、ジェイムス・モンロースクールにおいて、LSC⁷⁾の会長職を担っている。夫と息子が3人いる。

私は、メキシコからの移民だ。メキシコにいたときは学校の教員をしていた。そして、もっと積極的に生活していたが、こちらでは様々な障壁があることを感じている。特に言語の問題だ。週に2回英語を習いに行っている。

Gさんとは、同時期にPMに参加した。

メキシコでは、教員をしていた。娘が5年生になったときから、LSCのメンバーになった。LSCのメンバーになるのに英語を話す必要はない。会議はスペイン語で行われる。

PM終了後は、ランチレディとして高校の食堂で働いた。やはり、英語が話せないと自分が目指すような職に就くのは難しい。今は、LSCの会長だが、今後はお金のもらえる仕事を探したい。

PM事業を始めるにあたってLSNAが実施した講習会で「自分自身の目標」を問われて目覚めた。PMになると、校長と直接話をする事、スプリングフィールドに行くなど政治的にもエンパワメントされてPMとして活動するうちに、内なるリーダーシップに気づいたなどの結果が得られている。英語の習得は自分にとって自立の鍵である。

5. 終わりに

10名のインタビューを終えて、その豊かな経験とそこに含まれる重要なファクターの多さから、単なる研究材料として使用するだけでなく記録として活字にして残す必要性を感じ、本稿を取りまとめた。

7) Local School Committee: シカゴに独特の公立学校運営制度で、地元住民、親、教員によって組織される学校運営主体。予算や人事などを含む学校の運営を実施、決定する。校長の決定権を有する。

まとめにあたっては、個人名、年齢、個人のプライバシーに関わると考えられる点については、記号を使用するか、省いて倫理的配慮を行った。

今後、この結果を活用して、アンケート調査を実施し、事業のどの段階で、どのようなことをきっかけにメンターがエンパワメントされ、また、地域社会に統合されていったのかについて更に分析していく。

<引用文献リスト>

- Hong, S., 2011, A Cord of Three Strands: A New Approach to Parent Engagement in Schools, Harvard Education Press
- Warren R. M., 1995, Dry Bones Rattling: Community Building to Revitalize American Democracy, Princeton University Press

(本研究は、科研費基盤研究 C、研究番号 26380763、研究代表者仁科による資金を受けて実施している。)